

APPW2025 特別企画

クスリがわかる

シリーズ講演



作用機序 × 使い分け

疼痛緩和 / 腎・泌尿器系 / 代謝・内分泌系 / 中枢神経系
循環器系 / 呼吸器系

期間

2025年

3月17日

3月19日

会場

幕張メッセ
第4会場 (201-A)

6つのテーマについて「基礎」と「臨床」の視点からペア講演

クスリの作用機序 (基礎) から使い分け (臨床) までを網羅する「クスリがわかる」シリーズ講演を医療職 (医師、薬剤師、歯科医師、獣医師、看護師等) や学生を対象として開催します。

APPW2025 (第130回日本解剖学会・第102回日本生理学会・第98回日本薬理学会 合同大会) の参加登録者は誰でも参加可能です。

皆様のご参加をお待ちしております。

APPW2025
ホームページ





6つのテーマについて「基礎」と「臨床」の視点からペア講演

疼痛緩和 / 腎・泌尿器系 / 代謝・内分泌系 / 中枢神経系 / 循環器系 / 呼吸器系

3月17日(月) 13:40~14:30



疼痛緩和 座長 濱田 祐輔 先生 (星薬科大学薬理学)

「オピオイド、非オピオイド、 鎮痛補助薬の基礎的な理解と臨床的な実践」



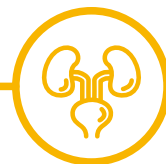
南雲 康行 先生
国立がん研究センター研究所
がん患者病態生理ユニット



天谷 文昌 先生
京都府立医科大
麻酔科学

痛みは危険を察知する役割を担う一方、持続的な痛みは患者のQOLを低下させる。特に、近年の基礎および臨床の研究報告より、痛みの残存は、がんや慢性疾病の増悪化や生存期間の短縮などの予後を不良にすることが示されている。しかしながら、「麻薬」への懸念や依存への不安から「医療用麻薬」に対する抵抗感を持つ患者も多く、疼痛コントロールが十分に行われていないことが問題となっている。臨床ではオピオイド鎮痛薬、非オピオイド鎮痛薬、鎮痛補助薬などが用いられており、それらを患者の状態に合わせて、適切に使用していくことが求められる。そこで、本講演では、鎮痛薬の使い方とその意義について基礎と臨床の観点から紹介する。

3月17日(月) 14:40~15:30



腎・泌尿器系 座長 齊藤 源顕 先生 (高知大学医学部薬理学)

「下部尿路機能障害の疾患と治療薬のupdate」



相澤 直樹 先生
獨協医科大学
医学部 薬理学



黒部 匡広 先生
琉球大学 医学部
システム生理学

本邦での最新の疫学調査によると、下部尿路に何らかの障害があり、蓄尿もしくは排尿に関連する症状(下部尿路症状)を有するヒトの割合は、20歳以上で77.9%、40歳以上で82.5%にまでの上昇と報告されている。具体的には、過活動膀胱(OAB)、低活動膀胱(UAB)、間質性膀胱炎/膀胱痛症候群(IC/BPS)、前立腺肥大症(BPH)、慢性前立腺炎(CP)、腹圧性尿失禁(SUI)など、老若男女を問わず多くの疾患がある。本講演では、これらの疾患の病態機序や、薬物治療における治療薬の使い分けについて、診療ガイドラインや学術研究の報告を基に、基礎および臨床の両面から最新情報を提供したい。

1日目



6つのテーマについて「基礎」と「臨床」の視点からペア講演

疼痛緩和 / 腎・泌尿器系 / 代謝・内分泌系 / 中枢神経系 / 循環器系 / 呼吸器系

3月18日(火) 8:30~9:20



代謝・内分泌系 座長 安藤 仁先生 (金沢大学医学部 細胞分子機能学)

「新時代の肥満症治療薬」



長田 直人 先生
金沢大学 医学部
細胞分子機能学



小林 俊介 先生
日本医科大学
千葉北総病院

わが国においても肥満症が問題となって久しいが、肥満症を食事・運動・行動療法で持続的に改善するのは極めて困難である。近年、2型糖尿病の治療薬として使用されるようになったGLP-1受容体作動薬は、血糖改善作用のみならず心血管および腎イベント抑制効果に優れ、肥満症にも有用であることが明らかになった。これまでは有害反応なしに効果的、持続的に肥満症を治療できるクスリはなかったが、2024年2月にGLP-1受容体作動薬が肥満症治療薬として使用開始されたことにより、肥満症治療は新時代に突入した。そこで本講演では、GLP-1受容体作動薬を中心に新しい肥満症治療薬についての情報を基礎・臨床の両面からお届けする。

3月18日(火) 9:30~10:20



中枢神経系 座長 池谷 裕二先生 (東京大学大学院薬学系研究科 薬品作用学教室)

「精神展開薬(サイケデリックス)の抗うつ作用とその可能性 ～臨床と基礎研究の最新知見～」



田中 謙二 先生
慶應義塾大学 医学部
先端医科学研究所
脳科学研究部門



内田 裕之 先生
慶應義塾大学 医学部
精神・神経科学教室

これまで“幻覚剤”と呼ばれていた“精神展開薬(サイケデリックス)”の中で、特にシロシピンは、治療抵抗性うつ病などの難治性精神疾患に対する有望な治療法として、近年大きな注目を集めています。本シンポジウムでは、精神展開薬の抗うつ効果に焦点を当て、臨床と基礎研究の最前線から得られた知見を共有します。臨床の視点からは、慶應義塾大学医学部 精神・神経科学教室教授の内田裕之先生が、精神展開薬の歴史、現在、今後の展望について解説します。精神疾患の回復過程におけるレジリエンスの視点から、精神展開薬が持つ可能性を探ります。一方、基礎研究の視点からは、慶應義塾大学医学部 先端医科学研究所 脳科学研究部門教授 田中謙二先生が、精神展開薬の作用メカニズムや脳神経回路への影響について、最先端の分子・細胞レベルの研究結果を紹介します。特に、構造MRI、超解像顕微鏡、質量顕微鏡などの技術を用いて明らかになった全脳ネットワーク変化を説明しうる分子・細胞変化をとりあげ、これらがうつ病や精神疾患の回復に寄与するかについて議論します。このシンポジウムでは、精神展開薬の抗うつ効果の基礎から応用までを包括的に取り上げ、精神疾患治療の新しい未来を切り開くための知見を提供します。ぜひご参加いただき、両先生の貴重な講演を通じて、精神医学・神経科学の最新動向を学んでください。

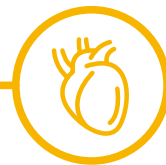
2日目



6つのテーマについて「基礎」と「臨床」の視点からペア講演

疼痛緩和 / 腎・泌尿器系 / 代謝・内分泌系 / 中枢神経系 / 循環器系 / 呼吸器系

3月19日(水) 13:40~14:30



循環器系 座長 高原 章先生 (東邦大学薬学部 薬物治療学)

「抗不整脈薬の世界：心臓リズムを守る薬のヒミツ」



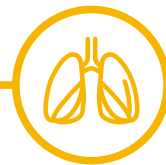
杉山 篤先生
東邦大学 医学部
薬理学講座



志賀 剛先生
東京慈恵会医科大学
臨床薬理学講座

心臓の正常なリズムを維持するために使われる抗不整脈薬について、解剖学、生理学、基礎薬理学、臨床薬理学の観点から深く掘り下げて解説する。これらの薬剤が心臓の電気活動に与える影響やリズム異常の治療における重要な役割について詳しく紹介する。また、最新の研究成果や臨床応用に加え、抗不整脈薬の副作用とその対策、そして患者に適した個別化医療の重要性についても焦点を当てる。本講演を通じて、心臓の健康を守るための科学的根拠に基づいた知見と実践的な知識を参加者の皆さまに深めていただくことを目指したい。

3月19日(水) 14:40~15:30



呼吸器系 座長 礒濱 洋一郎先生 (東京理科大学 薬学部)

「慢性咳嗽に対する薬物治療のアップデート」



亀井 淳三先生
順天堂大学 薬学部
薬物治療学研究室



伊狩 潤先生
千葉大学医学部附属病院
呼吸器内科

慢性咳嗽は様々な原因により長期間続く咳で、近年、医療機関を受診する患者が増加している。しかし、慢性咳嗽の多くはコデインを始めとする中枢性鎮咳薬が奏功せず、漫然と処方された鎮咳薬によって副作用が問題となることも多い。従って、医師は慢性咳嗽の原因となる基礎疾患を見極め、各患者に相応しい薬物治療を選択する必要がある。一方、2022年にP2X3受容体拮抗薬のゲーファピキサントが慢性咳嗽の治療薬として承認され、慢性咳嗽の治療に新たな選択肢が加わった。本薬物は咳の発生に関わる求心性神経の興奮を鎮める末梢性鎮咳薬である。本セミナーでは、慢性咳嗽の治療における最新の処方選択の考え方と、ゲーファピキサントを含めた咳の治療に用いられる薬物の機序および特性について理解を深めたい。

3日目